

ツノリ、コメノリ、ムカデノリ、フダラク、ヒトツマツ、スジムカデ、イバラノリ、カズノイバラ、タチイバラ、ホソバノトサカモドキ、オキツノリ、オオマタオキツノリ、ユカリ、ミゾオゴノリ、ヒラワツナギソウ、ハイウスバノリ、ユナ、ミツデソゾ、コブソゾ、ホソバナミノハナ

動物：ゴカイ、イトマキゴカイ、トコブシ、ヤツデヒトデ、イトマキヒトデ、バフンウニ、ムラサキウニ、セツカイカイメン、ダイダイイソカイメン、シロウミウシ、カメノテ、ムラサキイガイ、ホヤ、フジツボ

センター帰着後(午後3時)、神谷先生の指導で海藻の標本作りを行った。

午後8時より、神谷先生・久保田先生に講義をしていただいた。神谷先生は「生物の分類について」5界説以降の8界説(1981)から6界説(1998)への流れの中で、特に藻類が1つの界の中におさめられず、植物界・クロミスタ界・原生生物界に分類されるということである。久保田先生は「ベニクラゲの若返りについて」成体が卵に近い状態に戻るということであるが、そのメカニズムについては今のところ手がつけられていない。

7月29日(火)月齢29.3日

午前9時にセンターを出発し、岩屋港に向かい、実習船「おのころ」に乗り、佐野沖へ向かう。現地到着後、村上先生の指導でドレッジを開始する。ドレッジを3回行ったが、すべてきれいな砂地の地点で、ナメクジウオが全部で二十数匹採取できた。今回はイカナゴも数匹とれた。次にその周辺4ヶ所においてプランクトンネットを垂直に引いてプランクトンを採集した。今回はその周辺で水平引きも1回行った。また、赤潮が発生していたので、これも採集した。岩屋港に帰港し、湾内で付着生物(無脊椎動物)を採集した(カイメン、イガイ、ホヤ、ヒドロ虫等)。

午後1時30分より、実習を開始する。久保田先生の指導で、まず、採集ビンからプランクトンを取り出すためのポリスポイトをつくり、プランクトン観察を行った。方法は採集したプランクトンを顕微鏡で観察し、プランクトン図鑑を参照して、同定を行うものである。途中、兵庫県高等学校教育研究会生物部会の上中事業部長が挨拶され、その中でご自身で持参された「ヒノキバヤドリギ」について説明された。

午後7時から引き続き、実習(プランクトン観察)を行った。また、ムラサキイガイに付着している動物の観察と、ムラサキイガイの解剖・観察も行った。

確認できたプランクトンは次の通り：

ウミタル、フジツボのノープリウス幼生・キプリス幼生、オタマボヤの一種、オベリアクラゲの一種、エビのノー

プリウス幼生、ウスカワミジンコ、エボシミジンコ、ソコミジンコ、ケンミジンコ類、チョウクラゲ、カラカサクラゲ、ヤコウチュウ、ナメクジウオ、ムラサキイガイ、ウキツノガイ、ホウキムシのアクチノトロカ幼生・アンフィオキサス幼生、クダクラゲ、プラスラ幼生、ウニのブルテウス幼生、カナダマシ類のトロコフォア・ゾエア・メガロバ、ヤムシ、クラゲノミの一種、シャコのアリマ幼生、クモヒトデの幼生、ユメエビの幼体、ケラチウス、コスキノディスクス、キートケラス、リゾソレニア  
7月30日(水)月齢0.3日

午前9時より、カクレガニの一種を観察した後、昨日観察できた生物の確認を行った。

続いて村上先生の指導でプロダクトメーターを用いて、光合成量測定の実験を行った。また、フィコシアニンの蛍光について、説明をしていただいた。

午後1時より、初日に作製した海藻標本の仕上げを行った。

午後3時より、閉講式を行い、午後3時30分解散。

今回の実習では、採集時には、参加者の積極的かつ迅速な行動により、短時間で作業が終了し、余った時間は実習・講義に回しました。また、実習・講義は延長の連続でした。参加者の中には徹夜で採集・観察をする方もあり、意義深い研究会となりました。

今回の実習は、兵庫県からの参加希望者が多かったので、大阪で予定していた人数を兵庫県に回していただきましたが、それでも定員をオーバーし、2名が選に漏れました。次回は予定では平成17年(隔年実施)ですが、平成17年は日本生物教育会全国大会が大阪で実施されるため、平成17年実施は難しい状況です。この件については、大阪と連絡を取りながら、生物部会・生物学会で検討いたします。

最後に、お世話になりました講師の先生方、センターの職員の方々に感謝致します。